

いま、子どもたちは

今だから語れる「虐待」

―子育て経験者のアンケートから見えるもの―

清水 正江

私は、神奈川県藤沢市で、子育ての地域情報紙「ゆめこびと」を発行している母親です。子育てをして初めて「地域」を意識し、またいちばん必要である「地域に根ざした情報」がないことに気づいたため、自分たちで情報の発信者になるべく、一九九一年から母親の仲間と活動を続けてき

ました。創刊当初三歳だった長女も、今では中学生です。親として子育ての課題はどんどん変わっていきますが、いちばん大変だった乳幼児期の思いを忘れずにいたいと、十年間ボランティアで様々な子育て支援活動を行ってきました。

幼児虐待について特集を組む

このところ、虐待の報道が増え続け、大きな社会問題になっています。子どもを育てている親である以上、虐待のニュースを聞くたびに心がキリキリと痛みます。子どもたちの生きる権利さえ大人が剥奪している現状に、いてもたってもいられない危機感を覚えてしまうのです。と同時に、かつて自分たちも同じように追い詰められたつらい経験があり、とても他人事とは思えない。あの時はとても言えなかった。でも今だからこそ語れる思いがある……。自分の気持ちがどこでどう救われていったのかを改めて見つめ直してみることが、次の子育てで世代への力強いエールにならないだろうか。そう考えた私たちは今年の二月、子育て経験者一〇〇人へ虐待に関する緊急アンケートを実施することにしました。

とてもプライベートな問題であり、簡単に人には公言できない内容です。しかし、私たちの情報紙の読者を中心に、この調査の趣旨に賛同してくださったたくさんの父母が回答を寄せてくれました（回収率八十パーセント）。今までの活動に対する信頼感があつてこそその賜物だと、感謝せずにはいられませんでした。

イライラを子どもにあたつた経験

まず私たちは、「子どもをかわいく思えなかつたり、イライラする気持ちを子どもにぶつけてつ



らくあつた経験はありますか」と問いかけてました。ほとんどの親が、子どもをたたいた、つらくあつた、自分を責めて苦しんだという体験をもつていて、リアルな思いを正直に打ち明けてくれました。

「ひっばたいたり、お尻をたたいた」「大声を出したり、怒鳴った」「ヒステリックになり、必要以上に叱って子どもを追い詰めた」……。子どもが言うことを聞かないと、あるいは自分の気持ちにゆとりがなくなると、そのストレスを受け止めでもらうべく、子どもにあたってしまうのです。

ニュースで取りあげるような、子どもを死に至らしめる虐待をしているわけではないしろ、「一方的にガーガーきつく言って、子どもにあつた」というような言葉によるもの、「手をあげることはしなくても、目や態度に表すことで威圧感を与えた」といった、精神的な虐待をしていたと打ち明けてくれる人が多くいました。

しかし、そうした気持ちの根底には、「体の調子が悪く、疲れている時に、私はこんなに今疲れている、限界、と言いたい気持ちを子どもにぶつけた」「子どもがよくも悪くも全部自分にかかっているというプレッシャーがあつた」というように、子育てをひとりで担っている孤独感、不安感があります。そして、「生活リズムもめちゃくちゃで、体調が悪い時にやつあたりした。放任かと思えば、しつこく説教したり、なんて嫌な親だろうと自己嫌悪の毎日だった」と、自分の行為に対して嫌悪感を自覚しながら、それでもどうしようもなく、問題をひとりで抱え込んでいる姿が浮き彫りになりました。

気持ちを受け止めてもらえたのは

「こうした気持ちを、だれに、どこで受け止めてもらったのか」という問に対しては、圧倒的に多かったのが「夫」と「友人」でした（複数回答

で、それぞれ全体の四割)。いちばん身近な人に受け止めてもらったようです。その次に「特に受け止めてもらう人がいなかったたので、自分で処理した」「実家の母に話した」と続きます。その他は「子育ての先輩に話をした」「ベランダに出て、酸素の多い空気を吸った」「インターネットのメーリングリストに書き込んだ」「子どもに謝った」などの回答もありました。

ねっこにある原因や具体的な対策

「虐待を生んでしまう原因」に関しては、最も多かったのが「母親の孤立、密室育児」という答え。「こうあるべきという三歳児神話や良い母性仰」「母親のみに負担を背負わせる性差別や社会のシステム」「子どもで母親が評価される社会風潮」、また「核家族化」「地域での稀薄な人間関係」など、社会全体の問題が指摘されました。

一方、「虐待の連鎖、親自身の育てられ方、生

育歴」「親自身のストレス」「親になる前に精神的に自立できていないこと」「育児に関する本当に大切な情報、知識の欠如」など、親自身の生い立ちや未熟さに関することを挙げた人も。中でも、「夫不在の子育て。夫婦の不仲」を原因と考えている人が多く、夫に気持ちを受け止めてもらった人がいるのと同時に、受け止めてもらえなかったことに不満を強く感じている人が多かったのが印象的でした。

これらに対して、親たちが挙げる「対策」は、何よりも「育児のしんどさをひとりで抱えこまない、日常的なサポート」を、そして「地域単位でコミュニケーションできる場、出会いの場をつくる」「友たちをつくる」ことでした。「子どもと共にいる母親たちの居場所が社会にあること」「様々な世代の人との交流」「子育てに悩んでいるのは自分だけではないと知ること」など、地域の中で人とつながりながら子育てできることを望

んでいました。

また、「中高校生が、保育体験のできる機会を増やす」「親になる前の両親へのレクチャーや、子を生む前のカウンセリング」「親になる心得を、小学生の時から授業で取り上げる」など、子育てを学ぶ機会を、という意見。「気軽に相談できる場」「メンタルケアの場」など相談の機会を望む声。さらに、「親の心にゆとりをもたせる政策、社会づくり」「夫が育児にかかわれる制度改革」「気軽に子どもを預けられる、保育園の一時保育の増大」「虐待に介入できる公的機関をもっと増やす」など、行政や制度改革への意見も多数ありました。

経験者ならではのメッセージ

最後に私たちがどうしても聞きたかったのは、「そういう経験を経たあなたが、今まさに子育て

中の親に向けてどんなメッセージを伝えたいですか」ということです。集まったメッセージを並べてみると、どれもみな温かく受容に満ちた内容でした。

子どもへの接し方としては、「できないことじゃなく、できたことを喜べるといい」「子どもに、そのままのあなたでいいと言ってあげることが大切」「たとえ、子どもを傷つけたとしても必ず修復できる」「子どもはどんなに怒られても母さんが大好きだよ」といった励ましが書かれていました。また親自身に関しては「いい母になろうと頑張りすぎないこと」「自分だけで背負わな



いで」「子どもと一緒に成長すればいい」「自分の気持ちやだれかに言ってみようよ」「つらい時には助けを求めていいんだよ」「悩みは恵み、一緒に考えてくれる仲間がきつという」「あなたはよく頑張っている、大丈夫!」……。

経験者だからこそ同じ目線にたち、親の気持ちに寄り添える。そして心からのエールを送れるのです。発行後、こうしたメッセージを読んだ人から、「励ましがとても心にしみて、感動した」「気持ちがとても楽になった」「私だけではなく、みんな同じような経験をしてきたことがわかってほっとした」という反響が多数寄せられました。私たちは、体験や生きた言葉を次の世代へ伝えていくことの大切さを改めて感じました。

子どもがいくつになっても、親子関係の悩みは尽きません。だからこそ、いろいろな場所にいる

いるな人と出会い、つながって、対話をしたり、思いを分かち合うことが大切でしょう。家族という閉じたカプセルをひらき、人と人との生きた関係をつくっていくことが、現代の子育てには不可欠だと思えます。

虐待の問題は大変根が深く、多様な取り組みが早急に求められています。私たちは、この問題をできるだけ終わらせることなく、市民の立場で何ができるのかを考える学習会やネットワークづくりにも、今後取り組んでいくつもりです。地域の中でひとりひとりの大人が、それぞれの立場を超えてできることを考え実践し、みんなで「子育て」「親育ち」を育んでいきたいものです。

(地域情報紙「ゆめこびと」編集長)

「ゆめこびと」に関する問い合わせは、0466-244430 (TEL・FAX)